



五行画素
の
情景

伊東袖月
五行歌集

まえがき

五行歌は写真みたいだと思う。

スナップ写真のようなものもあれば気取ってポーズを取っているものもあり、風情はまちまちだ。けれどどの歌にも、その時々に見た情景や、心を横切ったさまざまな思いが写し出されている。

懐かしいと微笑みながら振り返れるものは少なく、ほとんどが恥じ入るばかりの作品だ。

歌は本物の写真のように修正したり加工したり出来ない。

粗（アラ）も変なクセもそのまま、ブサイクな心までもがそのまま記録されている。

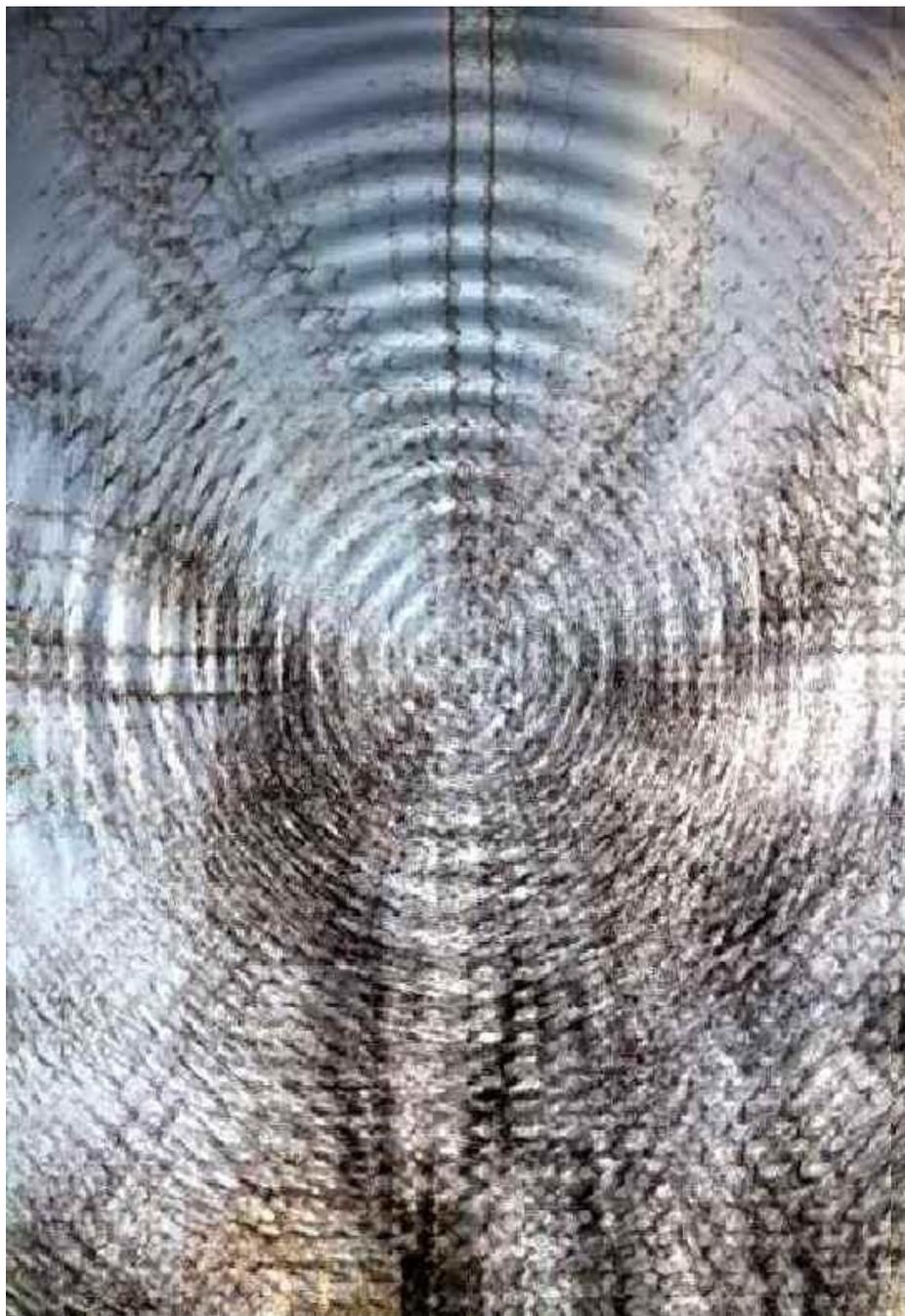
時と共にセピア色に変わって、なんとなくいい感じに...などということもないから始末が悪い。

だったら人知れずこっそり楽しめばいいのに...とも思うのだけれど、表現したい人間にとって、それを誰かに見てもらいたいというのは、もうビョーキみたいなもので仕方ないのかもしれない。

画素数わずか五行です。

この本を読んで下さるとなにかに、想いが届けばいいけれど。

伊東柚月



たゆたっている

—水の章—

紅い紅い刻は

とき

川べりを歩こう

ぬうたりと

からだを空っぽにして

哀しい歌うたって

口にすれば

とろとろと

ゆるんでしまう

声の輪郭

そんな名がある

浄化か

墮落か

どっちでもいいか

ほろほろと

酔っており

プールの底の赤い線だ

私のやさしきは

浅く透け

カルキ臭い

見て見ると揺れている

たった一つの

賛辞は

涸いた湖底の

湧き水

ああ 生き延びた

ゆるいゆるい

ハグなのに

包み込まれて

私は

少しもこぼれない

なにも待たない

なにも追わない

風いで

帆船ふねごと

時空の穴の中

凧いで

行き眩れて

あなたと

ボトルシップに

なれたならいい

流される女は

薄目を開けて

指の間の

水搔きを

密やかに使う

あなたの

蒼い水源に

出会った気がする

謚^{しずか}で

凜とした手紙の向こう

たっぷりとして

濃こまやかな

声の海に

小亀のように

たゆたっている

身体の

奥で

さざ波がたつ

そのハスキーボイスが

いけないのよ

あたしは

日暮れの鬼

姿が見えぬと泣くばかり

かくれんぼを

終われない

生まれてきたのは

笑うため

愛を知るため

ときどき

泣くため

藍と茜と薄墨色の

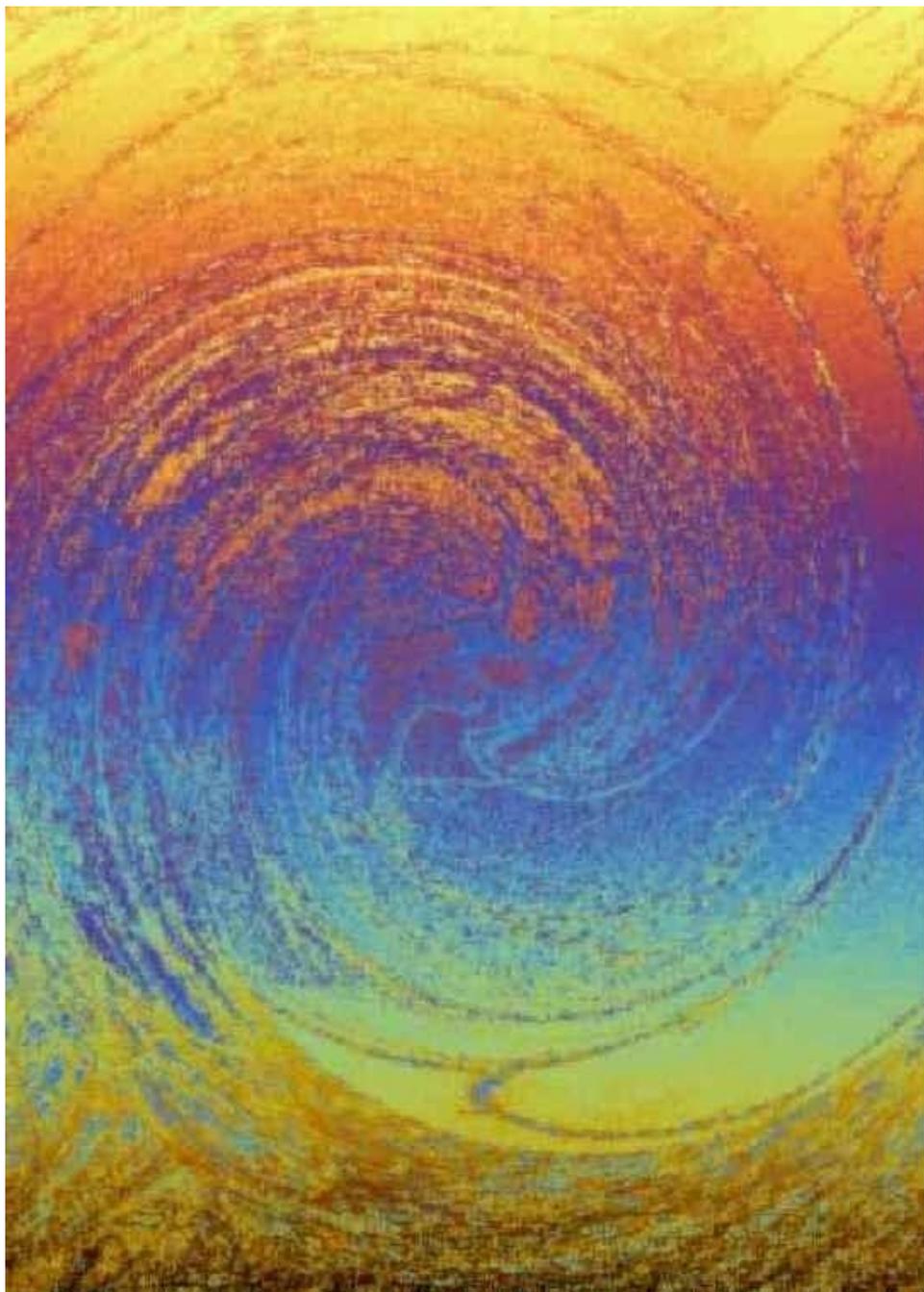
溶け合うところ

空の果てまで

流れ、流れて

わたしはブルース

それがなんだったの



それがなんだったの — 火の章 —

この世の

底

のような台所で

魚の腑はらわたが

てらてら光る

平凡が一番と

分かっていても

彼女を妬んでる

神に愛されたかった

私はサリエリ

無意識に

人を責めた

エラソ—な理屈を

ふりかざした唇が

ヒリヒリする

子を捨て

夫を捨てた

友からの電話

声に

酒の匂いがする

きれいなものなんて

いらないのよ

野薔薇をください

血のついた

その手で

ときどき胸に

魔物が棲んで

千口と舌を出す

熟れすぎた柿を

啜る夜など

自分を

責めて 責めて

ぼこぼこに凹んだ顔に

まだへばりつく

自尊心

脳梗塞の義父

知的障害の義姉

心を病む母

それがなんだっての

夕飯の仕度だ

胸の扉を

閉めて凌ぐ

母の罵詈雑言

この電話を切ったら

泣こう

自分の

嗚咽を聞いている

まだ

家族の帰らぬ

夕暮れの部屋で

肥大した

自意識が

ぐるぐる巻きついて

ミイラになりそう

中に居るのは誰？

ほんの一瞬にも零れる

自信のなさ

小首を傾げ

誰に媚びているのか

集合写真の中で

わたしの

少し内側で

私まがいのええ格好しいが

好かぬヤツにも

気を遣う

怒りの先に

踏み入れば

哀しみの沼地

行き場のない

鳥が舞う

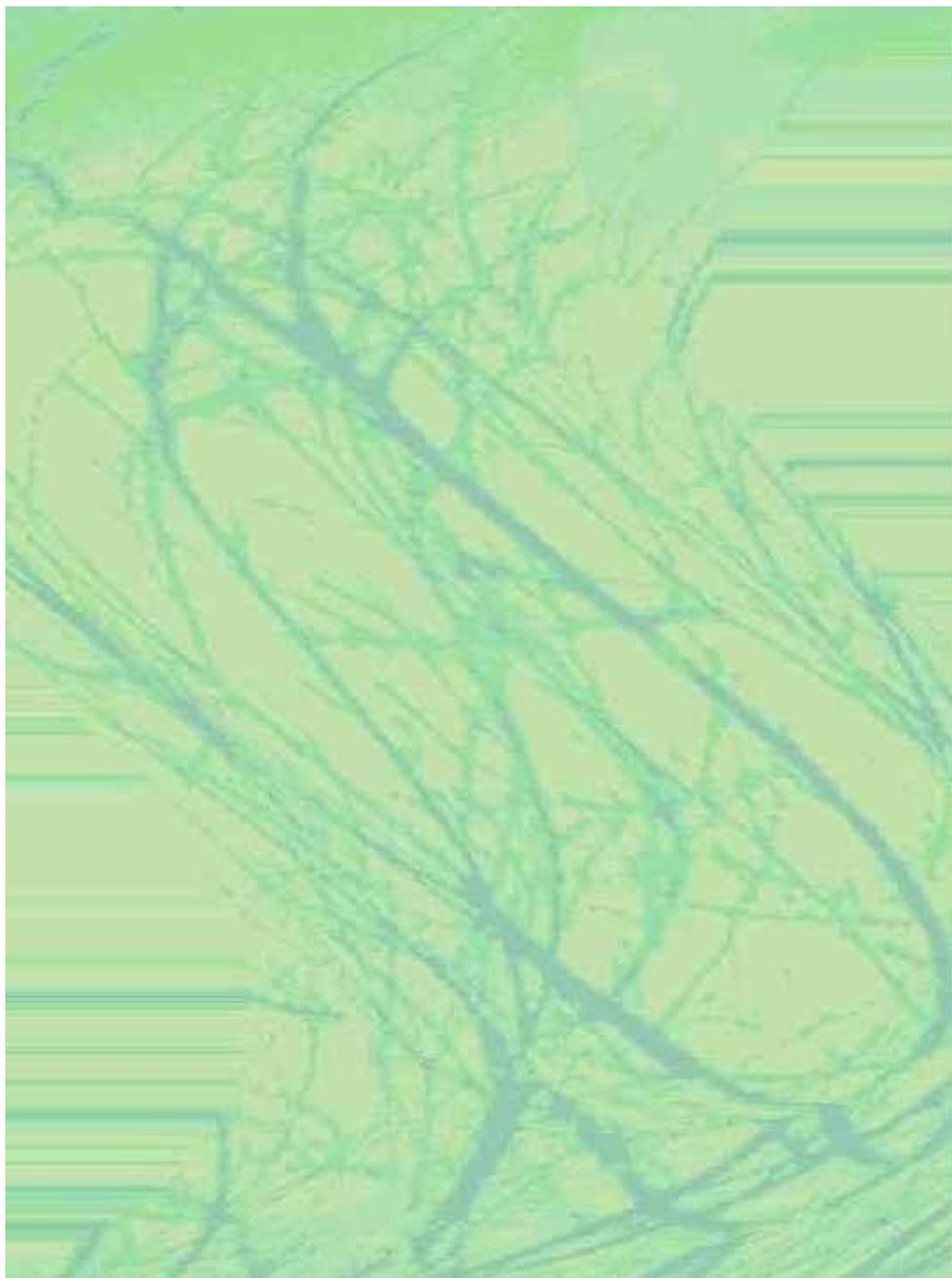
裏切ってゆこう

くだらない線

の外側に

私自身を

押し倒すのだ



ただひとつの旋律

— 風の章 —

畳の上に

生まれた

光の水槽

オーガンジーが

ひらひら泳ぐ

帰っておいでよ

失敗抱えて

昔みたいに

一緒にハモろう

マリノアの海に出て

銀杏の葉

くるくる

廻せば

ドガの踊り子

指先で舞う

母がいなくても

夏祭りは

あるにはあって

色をつけられた

ひよこみたいで

寝ぼけていても

あなたは微笑う

私が近づくと

とりあえず

微笑う

僅かに

欠く輪郭

片肌落とした

滑らかな

月の肩

葉裏が

ひるがえる

一瞬の白さよ

少女のうなじの

色っぽさみたいな

風をとらえ

上昇気流に乗る

鳥

翼は

大海の帆となる

いよいよ

上昇するとき

羽ばたきをやめ

鳥は

風に一切をあずける

私は強い

迷ったら

あなたの思考回路を

いつでも

辿れるから

十の慰めより

「いいかげん

笑ったら」

って突き放されて

明日をもらった

倣えるはずもない

あなたの静けさは

哭ないて

彷徨った

森の闇を帯びていた

何かを失くしても

花びらなのか

慈雨なのか

すき間を埋めるもの

降る道にいる

辿れば

来し方の足跡は

道になる

ただひとつの

旋律のようにうねって

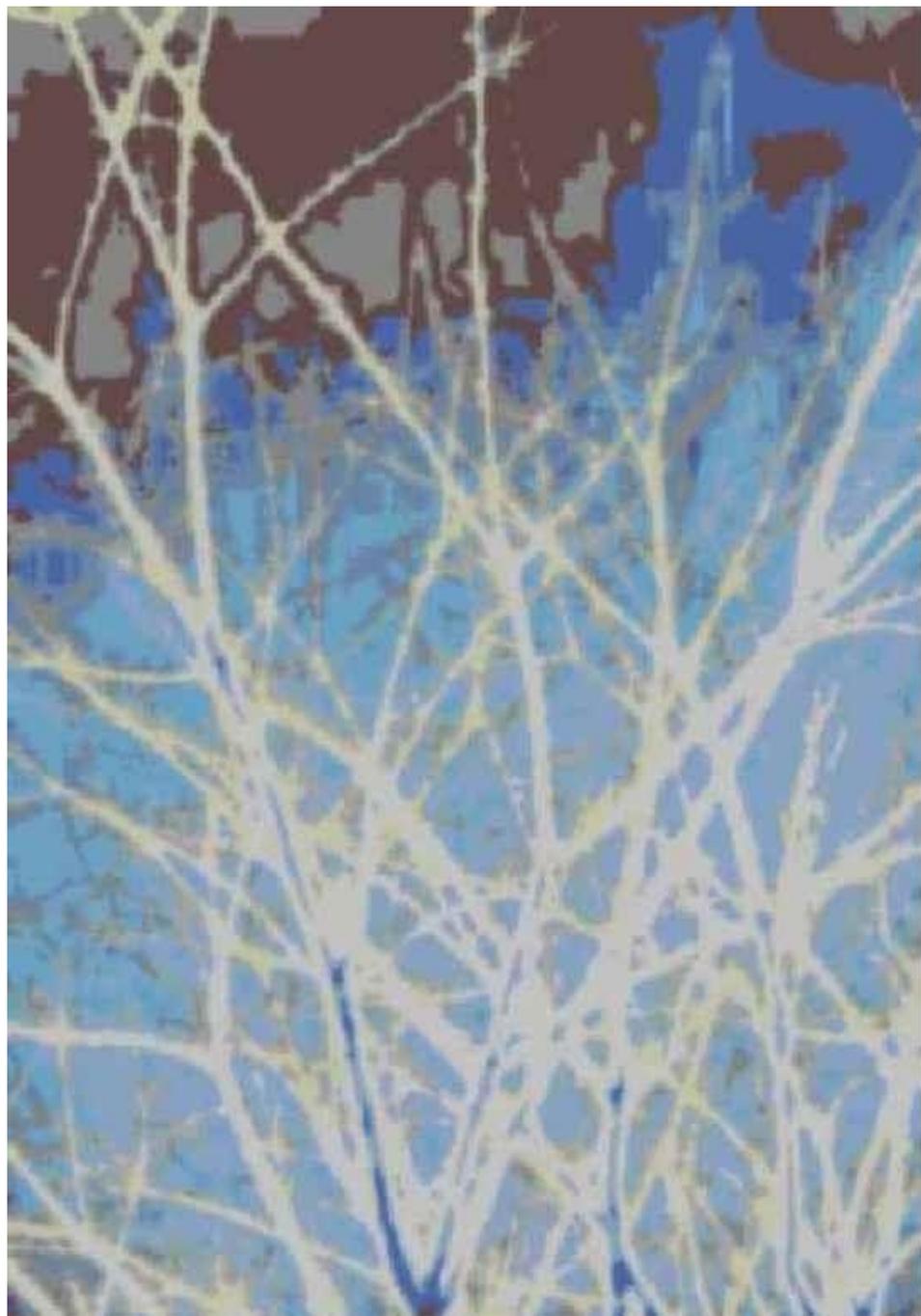
ひこうき雲が

ひとすじ

張りつめた青を分けても

空はまた

出会ってゆく



白骨の杖のように
——地の章——

幹が

輝くので

近づいて見ると

それは細い

いつかの傷痕でした

向き合うと

決め

厄介ごとを

くべる火を

踏む

いっそ

大きく凹もう

いつか

多くを満たす

器になるのだ

分厚くて

木の香りがする

選んだ家は

あなたの胸板

そのままだった

大きく

襟のあいた

服を着る

鎖骨に

痩せ女の意地

一人になった友へ

バースデーメールを

送った

「がんばるよ」

とだけ返事が来た

あと何百個の

じゃがいもの皮を

剥くんだらう

翼

たたんだまま

寂しさ

胸に閉じ込めないで

袋小路になっちゃうよ

猫一匹も

通らない

完璧さ

ゆえにでなく

そのひとの

余白に

惚れ惚れするのだ

誰も傷つけないよう

堪え続けた日々

脇腹に

切れないナイフが

刺さっている

絵に描いたような

幸せも

カンバスの下には

塗り潰された

悲哀があったりする

行いが

超えようとするとき

言葉の

真の意味が

立ち上がってくる

錆びた肩に

ハンドル

雪

だけが降る

乗り捨てられた

夜の自転車

ブレのない

ただ一本の線

そこに辿り着くまでの

数えきれない

捨て線

泣けないのは

おまえのせい

けれどプライドよ

白骨の杖のように

私を起たせている

あとがきにかえて

寡作とはいえ10年近い歳月は決して短くはなかったし、その間の作品を纏めるのは楽なことではなかった。1冊の本にするにあたり、統一感のようなものを多少は意識したつもりだ。そのため、気に入った作品でも外したものがある。逆に、以前出版した電書本の歌と一部ダブるものもある。また、幾つかのジャンルの歌は、別の機会に独立したテーマの歌集として出すつもりで意図的に外した。

自分の過去の歌と向き合う作業は、案外エネルギーと根気の要るものだった。候補作を絞り込み構成を考え、表紙や章の写真を加工する...といった作業より、よほど骨が折れた。高揚と消沈をくり返しながら、なんとかまとめた。

まとめたことで見えてきたもの、分かってきたことがある。自分の中にいま、確かにある。それがまた新たに、自分自身をひしゃげた缶かんみたいにさせもしているのだけれど。

でも、歌に対する新しい気持ちが芽生え始めているのも事実。それだけでも、まとめて良かったのだと思う。

この場を借りて、五行歌創始者で五行歌の会主宰の草壁焰太先生にお礼申し上げます。いつも歌会で全ての歌に真摯に向き合い、熱いコメントを下さる九州歌会の皆様に尊敬と感謝を。

電子書籍を勧めてくれた井椎しづくさんと、電書仲間の海の空こさん、金沢詩乃さんにも、ありがとう。

そして。
数ある電子書籍の中からこの本を選んで読んで下さったあなたに、心から感謝します。

2011年9月 少し暑さの戻ってきた一日の終わりに 伊東柚月

追伸
もしこの本を印刷してやろうという素敵な方がいらっしゃいましたら、以下のプリンター設定もお勧めです。
☆用紙…A4、レイアウトで「割付」4ページを選択
印刷後、切って綴じていただくとA6サイズの小さな本になります。紙を沢山使わなくて済みますよ。

五行画素の情景

<http://p.booklog.jp/book/17854>

著者：伊東柚月

写真：伊東柚月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yudukiitou/profile>

第一版 2011年9月7日 電子書籍にて発行

©Yuduki Ito 2011

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17854>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17854>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.